

---

# 全ての行き着く先

おいち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全ての行き着く先

### 【Nコード】

N9377G

### 【作者名】

おいち

### 【あらすじ】

11月のある日、杯戸町で殺人事件が起きた。容疑者は二人。一方は完璧なアリバイを主張し、もう一方はなかなか口を開こうとしない。そして事件はコナンの活躍により解決を迎えるが、それは全ての序章にしか過ぎなかった。

## 第1話・発端（前書き）

コ哀が含まれますので、予めご了承ください。

## 第1話：発端

そう、それは何でもないごく有りふれた日常から始まった。

木々の葉が赤や黄へと色付き始めた11月のある朝、松下銀二はいつもと変わらずに散歩へと出かけた。

昨日まで続いた曇天からはうつつてかわって、秋晴れと呼ぶにふさわしい青空が一面に広がっている。

東京都の杯戸町で金物屋を営む松下は、日々の運動不足と50歳を過ぎての体力低下を憂いて、半年ほど前から毎朝40分程度、町内の決まったコースを散歩することを日課としている。

当初妻にはどうせ三日坊主だろうと笑われたが、今まで雨の日も、炎天下の夏の日も休むことなく続けてきた。

歩き始めてから20分。とあるマンション脇の公園に着いた。

そこは遊具などの設備はほとんど整っていないが、四方を木々に囲まれ、また人気がなく落ち着いた雰囲気であることから、松下にはお気に入りの場所で、普段からここで水分補給をし、一息入れたところで再び家へと向かうのだった。

松下がいつもと同じように公園に入り、水飲み場の蛇口の前に立つと、その奥の茂みの中の異様な光景を目にして絶句した。

まさかとは思ったが、放っておくわけにもいかず、緊急用に持っていた携帯電話を取り出し、動揺し上ずった声で消防と警察に電話をした。

この事件が全ての歯車を狂わせる発端となったとは、まだ誰も知る由もない。

## 第1話：発端（後書き）

お読みいただき、本当にありがとうございます。これからまよろしくお願いいたします。

## 第2話：捜査開始

直ぐ様救急隊が駆け付けたが時はすでに遅く、茂みに覆い被さるよ  
うに倒れていた男は、すでに息を引き取った後だった。

その後警察が到着し、第一発見者となった松下に向けて質問を始め  
た。

「えー、あなたが発見者の松下さんですね。二三お聞かせください」  
茶色のコートに帽子を被った中年太りの男が、松下のもとへと歩み  
寄り口を開いた。

「まず、あなたが6時50分にこの公園に入り、その茂みの中に遺  
体を見つけた。これに間違いはありませんか？」

「はい、間違いありません。普段から散歩をすることは私の日課で、  
今日も時計を見ていつもと変わりませんでしたから」

未だ動揺を隠せぬまま、松下は言葉を慎重に選びながら答えた。

「そうですか。では、公園に入ったとき、辺りに人はいませんか？  
たか？」

中年太りの男が続け様に問い掛ける。

「ええ、私一人でした」

「分かりました。あと、散歩が日課とおっしゃっていましたが、普  
段からこの公園は通るのですか？」

「はい、毎日同じコースを歩いているので」

「いつも人気はない方でしたか？」

「そうですね、この時間、ここで人と会うことはほとんどありませんでした」

すると、そこへまだ若い細身の刑事がきて話を始めた。

「お話し中失礼します。警部、被害者の身元が判明しました。堂山栄吉、56歳。住所は埼玉県所沢市ですね」

「そうか。しかし、所沢とはまたここから随分と離れているな。とりあえず関係者の洗い出しを急いでくれ」

「はっ、かしこまりました」

警部と呼ばれたその男が命を下すと、部下は直ちに踵を返し公園を後にした。

「おっと、失礼。それでは松下さん、ご協力ありがとうございました」

警部は松下の方を向き直し、軽く頭を下げながら礼を述べると、再び捜査班の方へと戻っていった。

### 第3話：放課後

「今日はこれでおしまい。みんな、気を付けて帰るのよ」

「はい！」

教室内に女性教師と小学1年生の元気な声が響き渡り、礼をした後に各自が我先にと言わんばかりに教室を飛び出していった。

江戸川コナンは、小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美といった少年探偵団の仲間と共に学校を後にしたが、特に何か約束をするわけでもなく分かれ、最後は灰原哀と二人になった。

相変わらず会話の弾む二人ではない。何気なく携帯電話を取り出し開いてみると、画面に気になるニュースのテロップが流れた。

詳細を知ろうとメニューのボタンを押したそのとき、横を歩く灰原が突然話し掛けてきた。

「あら、また何か事件かしら？」

「あつ、ああ。今朝、杯戸町で殺人事件があったらしい。しかし、なんでおま…」

「だって顔にそう書いてあるもの」

言い切るのを遮るように、表情を一つ変えることなく澄んだ声ですら断言された。

相変わらず可愛くないヤツ、と喉元まで出かったが口には出さずに、ニュースの詳細へと目を移した。

〽11月12日の早朝、杯戸町の公園で堂山栄吉さん（56）が遺体で発見された。現場に凶器と思われるロープが落ちていたことから、警察は事件と断定して捜査を進めている〽

まだ発生したばかりともあって、ほとんど情報は流れておらず、やや肩透かしを食らったが、もしかすると探偵事務所の方に依頼があるとも思い、気を取り直して携帯電話を閉じた。

そして灰原とも分かれた後、階段を上って探偵事務所に入ると、毛利蘭はまだ学校から帰っていないが、小五郎は毎度の如く、沖野ヨーコの出演しているビデオを見ていた。

この様子じゃ依頼なんてあるわけないと瞬時に察知したコナンは、ただいまとだけ告げて荷物を置くと、再び階段を降りて阿笠博士の家へと向かうことにした。

## 第4話：接点

「おお、新一じゃないか。どうしたんじゃ？」

阿笠邸のドアを開け、靴を脱いでいる最中に博士から声をかけられた。

「いや、どうってことはないけど、何か新しいゲームはないかと思つて」

スリッパに履き替えながらそう言つと、博士はさも自信が有るように答えた。

「ちょうどいい。昨日新作の試作品が完成したんじゃ。RPGものだが、何かアドバイスがあつたら言つてくれ」

『偽りの世界からの脱出』というタイトルのそのゲームは、博士にしてはなかなかの秀作だった。

パーティーを組み、敵を倒しながら進めていくそのシステムは既存のものとは大差はなかったが、次のステージに進むのに必要な謎解きは巧妙に作り上げられていて、このゲームの売りでもあった。

「面白かったけど、ちょっと子供には難しすぎるんじゃないか？」

コナンは最初のステージを終えての正直な感想を述べた。

「やっぱりそうかのお。じゃあ街ごとにお助けキャラを置こうかの」

博士は一瞬顔を曇らせたが、すぐに解決策を思いつき満足そうに頷いた。

その後もコナンは順調に進め、博士はその様子を後ろから眺めていたが、ふと思いついたようにコナンに向けて話し始めた。

「そういえば、新一。今朝杯戸町で起きた事件を知っておるか？」

「ああ、さつき携帯で見たよ。あんまり詳しいことは分からなかったけどな」

コナンは画面から目を逸らすことなく返した。

「実はの、被害者の堂山さんとは以前に一度だけ会ったことがあるんじゃない。もう何年も前の話じゃが、とある集まりで友人に紹介されたの」

「へえ。ということは、その人も科学者なのか？」

思わぬところで事件の接点と巡り合ったコナンは先程までとは一変、ゲームどころではなくなり、コントローラから手を離して博士の方へ身を乗り出した。

「いや、彼は確か大学教授じゃったな。ええと、いただいた名刺があったはずじゃ……」

博士はそう言うつと部屋に戻り、しばらくすると黒い小さな名刺入れを手に戻ってきた。

その中には多くの名刺が束になっていたが、博士はいとも簡単に堂山

氏のものを見つけた。

「ほら、これじゃ」

そう言いながらこちらに見せると、そこには氏名の他に、埼玉大学教授という肩書きと、その下には住所と連絡先が書かれていた。

「それで、この人についてもっと分かることはないのか？」

コナンはやや興奮した声で早口に聞いたが、博士は知らないと言を横に振るだけだった。

コナンはその仕草にいささか落胆したが、それを機に事件の話を諦め、再びテレビ画面の方を向き直して新作ゲームの続きを始めることにした。

## 第5話：研究室

警視庁の捜査一課では、今朝通報を受けた殺人事件に関する会議が開かれていた。

「死亡推定時刻は、昨日の午後8時から9時の間。凶器は現場に落ちていたロープとみて間違いないでしょう。被害者の首に残った跡と一致しました」

会議室の前方に立った若手刑事が手元の資料を機械的に読み上げ、一息入れてからさらに続けた。

「被害者は堂山栄吉、56歳。埼玉大学教授で、埼玉県所沢市に妻と二人で住んでいます」

「凶器から何か特定できないか？」

室内中央に座った初老の刑事が問いかけた。

「ロープは一般的に市販されているもので、また指紋も検出されませんでしたので、それ以上を特定するのは厳しいかと……」

若手の刑事は声のトーンを落としてつつ答えた。

「被害者の周辺人物については？」

今度は最後尾に座った刑事が問いかける。

「大学の関係者については、現在千葉が担当して調べております。」

また、科学者との交遊もあったようで、こちらについては高木が担当しております。それ以外の交遊関係についてはまだ分かっておりません」

その後も会議は続いたが、発生してまだ間もないということもあり、大きな手掛かりを得ることなく終了した。

埼玉大学は埼玉県さいたま市の県庁からほど近いところにある。近年開発の進んだ周囲の高層ビルとは対照的に、広大な敷地の中には多くの木々が植えられている。

11月に入ったとはいえ、まだ衰えぬ日差しを正面から浴びて、キャンパス内を往来する多数の学生とともに、千葉は額の汗を拭いながら堂山の所属していた理学部の事務所へと急いでいた。

窓口で捜査の旨を伝えると、堂山が使用していた研究室へと案内され、その中では黒縁の眼鏡をかけた若い男が研究資料らしきものの整頓をしていた。

千葉が軽く一礼してから再び事情を説明すると、男は作業の手を止め、どうぞと言いながら椅子に腰掛けた。

その男は相坂順平といい、埼玉大学を卒業後、そのまま大学院に進み堂山の下で研究をしていたという。

またその関係から、堂山が受け持っていた授業でTAを担当することも多かったため、こうして主を失った資料の片付けを買って出たらしい。

そうした話が一区切りしたところで、千葉は本題を切り出した。

「堂山氏が普段から誰かに恨まれていたようなことはご存知ありませんか？」

「いえ、そういう話は耳にしていません。教授は温厚な方で面倒見もよくて、学生からは人気がありましたから」

相坂は寂しげな表情を浮かべつつも、きっぱりと言い切った。

「教授同士の付き合いについては？」

千葉はメモをとりながら質問を続けた。

「さすがにそこまでは学生の私には分かりかねます。ただ、今年からこの理学部の役員に選ばれたとおっしゃっていたので、それなりに付き合いはあったのではないのでしょうか？」

「そうですね。では、昨日の堂山氏の足取りはご存知ですか？」

「はい、昨日は午前中に大学の授業があり、私もTAとして一緒におりました。しかし終了後に教授が、これから人と会う予定があるとおっしゃって、それ以降のことは……。でも、まさかこんなことになるとは……」

今まで気丈に受け答えを続けた相坂だったが、終盤は何度も言葉を詰まらせた。その様子から千葉もこれ以上は質問を続けるのは厳しいと悟り、一言礼を述べてその研究室を後にすることとした。

## 第5話：研究室（後書き）

なかなか話が進展しなくてすみません……。次話あたりから一気に（事件の）核心に入っていくと思います。

## 第6話：聴取

研究室を後にした千葉はその足で事務所に寄り、学部関係者の名簿のコピーを受け取ってから帰ることにした。

ちょうどその頃、高木は堂山の自宅を中心に捜査を行っていた。付近の住民の話では夫婦仲は良好で、近隣とのトラブルもなかったという。

そんな人物が事件の被害者となったことについて、驚きを隠せないのが大半であった。

自宅では書斎の引き出しの中に名刺がまとめて置かれていたので、妻の了承を得て捜査本部へ持ち帰ることにしたが、それ以上の収穫を得ることは出来なかった。

この時期の日は短い。

外に出ると既に辺りは暗くなり始め、北風が強く吹いていた。

事件の発覚から2日経った日の放課後、コナンは探偵事務所に荷物を置くと、先日進めた博士の新作ゲームの続きをやりやりに阿笠邸へと向かった。

そして、玄関を開けて靴を脱ごうとしたとき、見慣れない二足の靴が目に入った。来客とは珍しいと思いつつリビングへと向かうと、面識のあるいつものコンビが座っていた。

「あれえ、佐藤刑事に高木刑事。どうしたの、いったいこんなところぞ?」

「コ、コナンくん。いや、ちょっとね……」

高木は面食らいいつつ言葉を濁したが、佐藤が直ぐ様割って入った。

「この前の大学教授殺害事件は知ってるでしょ?」

「ちょっと、佐藤さん……。」

高木は戸惑いながら佐藤を咎めたが、

「いいじゃない、阿笠博士は容疑から外れたんだし、この子に聞けば何か分かるかもしれないじゃない」

と言って聞かなかった。

高木も上司である佐藤のその一言に納得し、代わって話し始めた。

「聞き込みをしても、被害者と杯戸町を結び付けるものが浮かんでなくてね。それで、関係者を調べていたら阿笠博士の名前が挙がったから、こうして念のため話を聞きにきたんだ」

そういえば、事件が起こった直後に博士に堂山氏の名刺を見せられたな。

会合の時に交換した博士の名刺を見て聴取に来たってわけか。米花町と杯戸町は隣同士だからな。

しかし、こんなところで話が聞けるなんてラッキーだぜ。

コナンは即座に状況を飲み込んだが、思わぬ僥幸に内心の喜びを隠すのに必死だった。

「で、犯行時刻の阿笠さんのアリバイを確認したら、間違いなく証明されたから容疑からは外れたよ。我々としてはホツとしたけれど、捜査はまた振り出しだよ」

高木は安堵の表情を浮かべつつ、最後にわざとらしく大きなため息をついた。

その後、刑事の二人は被害者の生前の様子などについて博士に聞いていたが、やはりほとんど得られるものはなく帰っていった。

「いやあ、まさかわしが容疑者になるとはの。初めは驚いたわい」

二人を見送った後、博士はコナンに向けてこう漏らした。

「まあ、容疑から外れたんだからよかったじゃねえか。アリバイも証明できたみたいだし」

コナンはそう言ってまとめると、テレビの前に座り以前の続きを始めた。

「そういえば、灰原はどうした？」

一つのステージをクリアしたところで、ふと気になったので聞いて

みた。

「ああ、哀くんなら帰ってすぐに研究室に入っていったわい。高木刑事たちが来てたからのお」

コナンはそうかとだけ答え、またゲームに集中をした。

## 第7話：容疑者

「阿笠氏のアリバイは証明されました」

捜査本部に戻った佐藤は第一声でそう目暮に伝えた。

「そうか、とりあえずは安心したよ。しかし、こうなると捜査範囲を拡大せねばならん」

やはり目暮も普段から親交のある阿笠が容疑から外れたことについて、いささかホツとしているようだった。

しかし、すぐにそう厳しい面持ちで返すと、高木と千葉を呼び改めて捜査の続行を命じた。

次の日の昼過ぎ、千葉は再び埼玉大学を訪れた。

前回のときと同じように、まず事務所に一言申し入れてから研究室へと向かい、部屋のドアを叩き中に入ると、相坂は机の上に資料を広げ、何やら調べものをしているようだった。

「度々すいません、お忙しいところを。またお話をお聞かせ下さい」

千葉がそう詫びを入れると、

「いえ、大丈夫です。何かご協力できれば。どうぞお掛けになって下さい」

と相坂は作業の手を止めて、千葉を席へと促した。

そこから堂山の授業の枠組みや、生活パターンなどについての話を聞き、最後に研究室に残された過去のこのゼミの卒業生の名簿を受け取り捜査を終了した。

そして、研究室を後にする際にふと気になったことを相坂に問いかけた。

「そういえば、堂山教授はどのような研究をされていたのですか？」すると相坂はパツと表情を明るくし、一気に捲りたてて語り始めた。

「教授の専門は原子素粒子です。我々の身の回りに存在する物質は全て原子の集合体で、その原子をさらに小さな構成要素に分割したものを素粒子と呼び、……」

そこから、文系の千葉には今まで聞いたことのないような単語が次から次へと相坂の口から飛び出してくるので、くだらないことを聞いたもんだと後悔しつつも、適当な相づちをうちながら話を聞き流すことにした。

そして事件の発生から一週間、懸命な捜査の甲斐あって、再び捜査線上に容疑者が浮かび上がった。

捜査一課では容疑者に関する会議が緊張感に包まれて開かれていた。

一人は埼玉大学理学部の教授である柿沼信夫。

被害者の堂山より2歳上で、数年前から研究費を不正に着服してた

との疑いがあり、そのことを今年度より理事になった堂山に追及されていったという。

そちらの容疑に関してはほぼ『黒』で間違いなく、近々責任問題まで発展するのは避けられない状況に追い込まれていたと、理学部の関係者から証言を得られた。

そしてもう一人挙げられたのが、堂山のゼミに入り、5年前に埼玉大学を卒業した緑川彰。

こちらは動機に関しては一切不明だが、千葉が持ち帰った過去の名簿から、住所が遺体発見現場であった公園のすぐ裏のマンションであることから浮上してきた。

「よし、この二人に絞って捜査を徹底的に進めてくれ！それでは解散」

日暮の鶴の一声を機に全員が一斉に勢い良く立ち上がり、各々の持ち場へと早速向かっていった。

「例の事件で緑川が容疑者に挙げられました」

「そうか……。本当にヤツが殺したのか？」

「いえ、緑川につけていた者からそういった報告は受けていません。それに、その時間は……」

「そうか……」

「どうしますか？」

「念には念を入れておけ。後はお前に任せる」

「はっ、かしこまりました」

## 第7話・容疑者（後書き）

やっとここまで辿り着きました。まさか7話かかるとは自分でも思いませんでした…。これからもよろしくお願いいたします。

## 第8話：アリバイ

会議が開かれたその日の午後、高木は千葉と共に埼玉大学を訪れ、柿沼のもとへと向かった。

ところが、研究室の前まで来るとドアの脇に「授業中」との札がかかっていたので、二人は一度その場を離れ、近くのラウンジで終了まで待つことにした。

そこは研究室専用のフロアで、さらに授業時間中ということもあり、辺りには誰もいる気配がなく、その様子を確認してから千葉が小言で話し始めた。

「なあ、高木。一つ聞いていいか？」

千葉のその真剣な表情に、高木も自然と身構えた。

「佐藤さんとはいったいどこまでいったんだ？」

「……はあ？」

その表情と内容のあまりのギャップに、高木は返す言葉も見つからず、ただ呆れるだけだった。

「だから、佐藤さんとどこまで進んだのかってことだよ」

まるで中学生のような質問を繰り返す千葉に、高木は顔を赤く染めつつ早口に返した。

「バ、バカ！今はそんなこと関係ないだろ！」

そう言つて立ち上がると、備え付けの自販機に向かいコーヒーを二つ買った。

その後ろ姿に向けて千葉はつまらなそうに、そうかと呟くだけだった。

その後二人は買ってきたコーヒーを飲みながら事件についての話を交わしていたが、気がつくやと授業の終了の時刻が近づいていた。

コーヒーの残りを一気に飲み干し、千葉がそれを捨てようと立ち上がろうとしたとき、柿沼の研究室の前に人影が見えた。

「おい、あれがそうじゃないか？」

「ああ、きつとそうだな。いくか」

そして二人が研究室に入ると、そこには白髪の間じつた頭髪がやや禿げ上がり、銀縁の眼鏡をかけた男が、只今の授業で使つたである資料の片付けを行つていた。

しかし視線をやや下に移すと、到底60歳近い体とは思えない筋肉質の肉体を誇つていた。

「あの、堂山教授の事件について、いくつかお伺いしたいのですが……」

まず高木が口を開いた。

すると柿沼は明らかに不機嫌そうに言い放つた。

「ああ、話には聞いているよ。で、俺に何の用だい？」

眼鏡の奥からの威圧するような目にも臆することなく、高木は質問を始めた。

「えー、あなたは聞いた話によりますと、研究費の着服の疑いを堂山氏にかけられ、仲は良好でなかったようですが……」

「ふん、そんなことは関係ないね」

柿沼のぶつきらぼうな口調は変わらない。

「それでは、先週の木曜日の夜、午後8時から9時の間に何をされていたか覚えてますか？」

「ふん、アリバイか。えーっとその日は……」

と言いつつ、鞆を開けて中から手帳を取り出した。

「ああ、先週の木曜は古くからの友達と麻雀をしていたんだ。浦和の駅前の「和」という雀荘で、7時から終電の0時前まで。疑うなら確認してみるといい」

柿沼は今までの口調から一変、いとも自信満々に言い切った。

柿沼の聴取を終え、埼玉大学を後にしたその足で浦和の駅に向かい、雀荘「和」に入った。

店内には特有の牌をかき回す音と有線放送の音楽が混ざって響き渡り、部屋一面につい顔をしかめたくなるほど煙草の煙が充満している。

二人は早速店長に事情を説明し、別室で話を聞くことにした。

「先週の木曜日の夜、この方が来店しませんでしたか？」

柿沼の写真を片手で見せつつ、話を切り出した。

「ああ、柿沼さんね。いつも一人でも来るほどの常連だから、よく知ってるよ。先週の木曜日ね……。ちよっと待っていて下さい」

店長はそう言っただけで一度部屋を離れ、すぐに戻ってきた。

「ああ、来てますね。うちではポイントカードを預かってるんですけど、ほら、ここに日付があるでしょうちよっと待っていて下さい」

そう言っただけで店長は一度部屋を離れ、すぐに戻ってきた。

「ええ、来てますね。うちではポイントカードを預かってるんですけど、ほら、ここに日付が入っているでしょう」

店長はカードの裏面を見せ、そこには確かに堂山が殺された日付が印刷されていたが、さらにその横には「4：47」と店で遊んでいた時間の長さまで記載されていた。

「これ、何時に来店したか覚えていませんか？」

高木が重ねて質問をすると、店長はやや顔を曇らせて答えた。

「いや、その日は私休みだったものでね……。ちよっと別のヤツを呼んできますわ」

そして店長が再び部屋を出ると、今度はアルバイトの学生と思われる若い男が代わりに部屋へと入ってきた。

「柿沼さんなら、木曜日来てましたね。で、閉店までいましたよ。その日最後までいたのは、柿沼さんたちのグループだけでしたから、よく覚えてるんです」

その男は警察の質問に対して、どこか使命感を持った声ではっきりと答えた。

雀荘を出て車に乗り込み、助手席に座った千葉がボソツと口を開いた。

「アリバイは完璧だな……。この様子だと、もう一人の方がクロか……」

高木はその声に反応することなく、アクセルを踏んで車を発進させた。

## 第9話：黙秘

高木と千葉が埼玉大学で捜査を進めていた頃、遺体発見現場のすぐ裏のマンションでは緑川に対する聴取が行われていた。

緑川は5年前の埼玉大学の卒業生で、現在は大手電機メーカーの研究所に勤めている。

180cmを超す長身だが、肌は全体的に色白く、頬はこけ落ち、いかにも不健康というほど痩せていた。

「緑川さん、先週の木曜日の夜に何をしていたか教えて下さい」

白鳥は淡々とした口調で緑川に問いかけた。

「一週間も前のことなので……覚えていません……。多分家にいたと思いますが……」

緑川は消え入りそうな小さな声で、自信無しに答えた。

「しかし、マンションの監視カメラを確認すると、あなたらしき人物が午後7時過ぎに外出しているんですよ。そして再び帰ってきたのが11時過ぎだ。この間、あなたはいったい何をしていましたのか？」

白鳥が強い口調で一氣にまくしたてて問い詰めると、緑川は顔から血の気が引き、冷や汗がうっすらと浮かび始めた。

しかしそれを拭うことすらせずに、うつむき加減にやはり小さな声で答えた。

「……いえ、覚えていません……」

何を聞いてもはつきりと口を割らない緑川に対して白鳥は苛立ちを覚えながらも、必死にそれを押し殺して質問を続けた。

しかし、結局最後までほとんど何も聞き出すことが出来ずに、マンションを後にすることになった。

高木たちが捜査本部に戻ると、白鳥が部下に何かを命じているようで、その様子が一段落するのを待って話し掛けた。

「白鳥警部、そちらの方はどうでしたか？」

「何も収穫はないね。何を聞いても、分かりません、覚えていません、だからね」

両手を肩の前で広げ、首を傾げながらオーバーリアクション気味に答えた。

「で、高木くんの方はどうだったんだい？」

「はい、こちらは犯行時刻前後のアリバイを確認できました」

「そうか……。じゃあ今のところはこちらの方が濃厚かな」

白鳥はそう言うと、再び自らの持ち場へと戻っていった。

そして高木と千葉も遅めの夕食をとるために、本部を離れることと

した。

## 第10話：依頼

柿沼のアリバイが確認されたことで、大学教授殺害事件の疑いは緑川に向けられた。

しかし、緑川にしても証拠はまだ見つかっていない上に、はっきりとした動機も判明していないことから、逮捕にはまだ踏み切れていなかった。

そうして事件から一週間が過ぎると、新聞やニュース、ワイドショーでも次第に取り上げられる機会は減り、世間の関心は薄れていった。

そんな中、コナンは学校から帰ると、出された宿題を片付けていた。

（しかし、高校生にもなって漢字の書き取りとはよ……。さっさと終わらせて博士のところにでもいくか）

そう心の中で不満をばやきながら、「水」や「木」といった漢字を機械的に書き殴った。

そしてほんの10分足らずで全てを書き終え、探偵事務所を出ようとした瞬間にドアが開き、高木が入ってきた。

「毛利さん、一つ協力してもらいたいことがあるんですが……」

開口一番にそう述べると、本能的に杯戸町での事件のことと悟ったコナンは外出を諦め、来客用の茶を用意しながら、二人の話に聞き耳をたてることにした。

「実は杯戸町の事件は容疑者がある程度絞られてまして……」

「ああ、それでこの名探偵毛利小五郎の出番がきたというわけか」

最近暇が続いていた小五郎は、久々の依頼にやや胸を踊らせながら話を聞き始めた。

「ええ。それで、一人は動機は十分なのですが、犯行時刻のアリバイが確認されて、もう一人は動機は不明ですが、アリバイがはっきりしないんです」

「なんだよ、そんなことなら話は簡単じゃねえか。アリバイのないヤツが犯人に決まってるだろ」

小五郎はあまりのこの単純さに、突き放すように言った。

「はい、本部の方もそういう方向で一致しているんですが、どうにも腑に落ちないことがあって……」

「なんだ、言ってみろ」

そこから高木は柿沼と緑川について、被害者との関係や、動機の有無について語りだした。

「そして、柿沼の聴取の際にアリバイを確認したとき、柿沼が一瞬ニヤリとしたんですよ。それがどうも引っ掛かっている……。何か作威的なものがあるのではないかと……」

「つまり、こういうことか。その柿沼ってヤツのアリバイに何かしらのトリックがないかどうか、俺に探ってくれということだな」

「ええ、そういうことです。お願いできますか？」

「ああ、この名探偵毛利小五郎に解けない事件などない！任せておけ！」

そう小五郎が胸を張ると、高木は一礼して事務所から去っていった。

## 第10話：依頼（後書き）

二桁の第10話に入りました。それなのになかなか話が進まなくて  
すいません…。これからもご愛読お願いいたします。

## 第11話：公園

「で、なんでお前までついてきてるんだよ？」

遺体発見現場の公園に向かう途中、小五郎が明らかに不機嫌そうな声で言う。

「だって家にいたってつまないもん。それならおじさんの名推理を勉強したいなあ、って思って」

得意の甘え声でその場を凌ごうとすると、

「にはやはは、そうか、そうか。お前も可愛いとこあんじゃねえか。しっかり勉強しとけよ。ただし、邪魔だけはしちやいかんぞ」

と、一変して明るい声になった。

ははっ、相変わらず単純なヤツ……。

そう思ったが口には出さず、うんとだけ返事をしておいた。

その後何の会話もないまま、しばらく歩いていくと公園に到着した。まだ昼の3時過ぎだというのに、辺りに人影は見当たらず、物音すらほとんど聞こえなかった。

昼でこの様子なら、朝まで遺体が発見されなかったのも頷けるな。

それが公園に入っただけの最初の印象だった。

そして小五郎が公園内をあちこちと調べている間、コナンも辺りを歩いて回ることにした。

周囲は木に囲まれて、公園脇の通りは人の往来もほとんどない。確かに犯行にはうってつけの場所と言えるが……。

しかし、犯人はどうやってこんなところへ呼び出したんだ？

柿沼が犯人なら、自分に足がつかないよう、この場所を選んだというわけか。

しかしそうならば、なぜわざわざ被害者はここまで出向いてきたのか……。

緑川ならば自宅に呼び寄せて、そこから杯戸駅まで送る途中、ここを犯行現場に選べるが……。

そんなことを考えていると、後ろから小五郎に帰るぞと声をかけられたので、素直に従って公園を後にした。

そして探偵事務所に戻り、一息ついたところで小五郎の携帯電話が鳴った。

「……ああ。……分かった。気をつけて帰ってこいよ」

その口調から相手が蘭だということは容易に想像できた。

「蘭は今夜部活で遅くなるらしい。で、メシをどうにかしてくれと言われたが、俺はこれから柿沼に会いに行くから、お前は発明家のじいさんのところでもいってこい」

そう勝手に決め付けると、じゃあなと言って事務所をそそくさと出ていったので、コナンは鍵をかけて階段を降りていった。

冬の日は短い。

既に太陽は西に傾き、街全体を赤く染めていた。

## 第12話：買物

「おーい、博士ー」

玄関で声をかけたが返事がなかったの、そのまま上がることになると、地下室から灰原が出てきた。

「博士なら出かけてるわよ。もうすぐ帰ってくると思うけど。それより、こんな時間に何の用？」

「いや、おっちゃんも蘭も出ちまったんで、ここで夕飯でも食べさせてもらおうかと……」

「はあ？そんなの急に言われても、あなたの分なんてないわよ！」  
半ば呆れ顔で、語尾を強めて言い放たれた。

ところが、そりゃまあ当然だよな……と落胆した瞬間、

「ま、いいわ。まだ作ってないから、材料を買い足せば何とかなるわ。その代わり、買い物付き合っつてよね」

と、思いもよらない言葉が返ってきたので、ああとだけ生返事をした。

そして、スーパーの食品コーナーに着くと、かごにてきはきと品物を入れる普段とは違った灰原の姿に感心すら覚えてしまった。

「お前……、どう見ても小学1年生には見えねえよなあ……」

そう漏らすと、灰原はこちらも見ずに、

「お互い様でしょ」

とだけ言っただけで先に進んでしまったので、慌てて追い掛けることにした。

「しかしよお、俺の分が急に増えたからって、こんなに買うことはないだろうに……」

今度はレジでの精算を終えて表に出たところで、両手いっぱい荷物を持たされた文句をぶつけてみると、

「あら、せっかく荷物持ちがいるんだから、まとめて買っておかないと損じゃない」

と悪ばれる様子もなく、さらっと一蹴されてしまった。

夕飯をご馳走になる立場としては、その言葉に何も返すことができず、ただただ横をついていくことにした。

その後は特に会話もないまま歩いていき、商店の並ぶ大通りを抜けて住宅街に入った。

既に陽は落ちて空はコバルトブルーに染まり、道を照らすのは立ち並ぶ街灯だけで、その光景はどこか昼に訪れたあの公園を思い起こさせるものがあった。

そういえば、あの公園の照明はどうなってたかな？

昼間にいったもんだから、すっかり確認するのを忘れてたぜ。

あれだけの場所なら、相当暗いはずだな。

メシを食ったらその帰りに寄っていくか。

と、そんなことを考えているうちに博士の家に着き、ようやく重たい荷物から解放された。

疲れた体をソファーに預けてテレビのスイッチを入れると、仮面ライダーが放映されていたので、料理ができるまで眺めていることにした。

### 第13話：闇

コナンはしばらくソファーに腰掛けてテレビを眺めていたが、支度が整うのをただ待っているだけというのも気が引けたのでキッチンを覗いてみると、灰原が慣れた手つきで料理を進めていた。

「ちょっと。見てるくらいなら手伝ってよ」

こちらに気付いた灰原に言われたので、食器棚に並んだ皿や箸を運ぶことにした。

そうして全ての準備が整うと、テーブルの上に所狭しと料理が並べられ、そのあまりの豪勢さに一瞬食べるのを躊躇ったが、すぐに箸をつけ簡単に平らげてしまった。

「お前って意外と料理上手なんだな……」

食べ終わったところで、素直な感想を口にしてみた。ところが、意外という言葉に怒ったのか、それともただの照れ隠しなのか、灰原はこっちをチラッと見ただけで何も言わなかった。

その後、ご馳走になった礼にと食器洗いを手伝い、一段落したところで公園に向かうことにした。

一応蘭には遅くなると断りは入れておいたが、遅くなりすぎて心配をかけるのも面倒なので早めに博士の家を出た。

「のお、哀くん。普段から今日くらいの料理を食べたいんじゃないが…

…」

コナンが出ていくのを見送った博士が視線を灰原に移して呟いた。

「ダーメ、今日は特別。また明日からはいつも通りよ」

と灰原は少し笑みを浮かべて答えると、すぐに地下室へと戻っていた。

杯戸町の公園までは博士の発明品であるスケートボードで向かったので、思ったよりも短い時間で着くことができた。

しかし、公園の入口の前に立ったとき明からな違和感を感じた。

周囲は街灯に照らされ、歩くことには事欠かない明るさがあるが、公園内はまったくと言っていいほど光がなく、不気味な雰囲気醸し出している。

入口から何歩か中へと進むと、表の街灯の光も木々に遮られ、自らの足元すらろくに見えないほどの暗さだ。

コナンはこれまた博士の発明品である腕時計型ライトで辺りを照らし、さらに中へと進んでいくと、備え付けの椅子の脇に照明用の支柱を見つけた。

やはり照明施設がないわけではない。

どうやらただ切れているだけのようだ。

そのことを確認したコナンは、遺体が倒れていた茂みの前まで移動した。

そこで今度は明かりを消してみた。

すると当然のように、周囲は闇に包まれ何も見えなくなった。

もし、この公園の照明が犯行当時も切れていたとしたら、こんなところで殺害できるだろうか？

明かりの全くないこんな場所に二人でくることが自体不自然極まりない。

その上、この暗闇の中で相手の首をロープで絞めるのは至難の技だ。

つまり、殺害は別の場所で行われ、犯人はここに遺体を放置した…

…。

そんな考えに行き着いたコナンは、それ以上の捜査を諦め、探偵事務所に帰ることにした。

「まだ緑川の野郎を殺らないんですか？」

「今はサツの目も厳しい。殺るのは真犯人が捕まってからだよ」

「しかし、あいつがべらべらとサツに漏らしたら……」

「ふん、その心配はねえってさ」

「そうですね……」

「ん、あのガキは……確か……」

## 第14話：空白

翌日、コナンは小五郎とともに高木の運転する車で埼玉県新座市へと向かっていった。

（20分ほど前）

土曜日で学校が休みということもあり、蘭は朝食の片付けを終えりと部活の練習に出かけていた。

それからしばらくは事務所に二人きりだったが、11時を少し回ったところで高木が訪れてきた。

「毛利さん、これから死亡推定時刻に柿沼と麻雀を打っていたという人物のところへ行くのですが、ご一緒していただけますか？」

そうして小五郎が外出の準備をしている間に、コナンは昨晚感じたことを高木に言ってみた。

「ねえ、高木刑事。堂山さんって、本当にあの公園で殺されたの？」

「えっ、どういうことだい？コナン君……」

思いもよらないことを突然ぶつけられ、高木は動揺を隠せずに聞き返した。

「あのね、昨日の夜あの公園の横を通ったんだ。そうしたら、中の街灯が消えて何にも見えなかったよ。そんなところで人を殺せるかなあ？」

コナンは相変わらずの子供じみた声で答えると、高木はうーんと唸って、そのまま黙り込んでしまった。

くそして現在く

「で、なーんでまたお前がついてきてんだよ！」

昨日と全く変わりのない台詞を小五郎が吐く。

「まあまあ、いいじゃないですか。コナン君は毛利さんに鍛えられているだけあって、鋭いところに気がつきますから」

高木に持ち上げられつつ説得された小五郎は万更でもないようで、厳しい面持ちながらも、そうかと相槌を打って引き下がった。

「それで、一つ気になることがあるんですが……」

埼玉県に入っただけしばらく走り、赤信号で停まったのを機に高木が口を開いた。

「あの公園は街灯が切れていて、夜になると全く視界がないんです……」

信号が青に変わり車が発進してからも、公園が殺害現場ではない可能性について話し続けた。

その話を聞き終えた小五郎は少し間を空けて、

「なるほど……。しかし、それだけでは犯人の手がかりとはならん」とだけ言った。

そうだよな、おっちゃんの言う通り、それが分かっただけじゃ真犯人には何も近づかない……。

そんなことを考えているうちに、車はようやく目的地に着いた。

インターホンを鳴らすと、すぐにドアが開き妻と思われる女性が出てきたので、高木が簡単に要件を告げ中へと案内された。

そして応接室に通され、椅子に腰掛けたのと同時に、恰幅のいい男性が入ってきた。

「どうも。この度は刑事さんが何の用で？」

その男はそう言いながらコナンたちの向かいに座った。

「早速ですが、先週の木曜日に柿沼氏と一緒に浦和で麻雀を打ちましたか？」

高木はいきなり本題を切り出した。

「ああ、先週確かに柿沼とやったよ。調べれば分かるが、恐らく木曜日だったかな。久しぶりにあいつから連絡があったと思えば、麻雀の誘いだもんな」

「時間は覚えていますか？」

「ああ、夜の7時過ぎからだっただな。その日は私が仕事の関係で15分ほど遅れて最後だったから、よく覚えているよ」

「それで12時前まで」

「ああ、その辺りがみんな終電だからね。丁度店も閉める準備をしてたから間違いない」

「ここまでは雀荘で聞いたのと同じだ。」

「では、柿沼氏が途中で抜けたなんていうことは……?」

「えーっと、何時かは覚えてないけど、途中仕事の電話だと言って一度外に出たな。10分くらいで戻ってきたけどね」

あつた。

空白の時間が……。

堂山が雀荘付近で殺され、何らかの方法を用いてあの公園に遺体を移送すればアリバイは偽装できる。

後はその方法さえ解ければ……。

コナンが閃いたのと同時に、高木も恐らく同じことを考え付いたのだろう。

礼を言っただけで早々に話を切り上げると、車を急いで浦和方面に走らせた。

「……信じてくれ。私は絶対にやってない……」

「ええ、あなたじゃないのは分かってますよ」

「しかし、警察は私を疑ってる……」

「大丈夫です。現在あの毛利小五郎に調査を依頼していますから、直に真犯人が捕まるでしょう。だから……」

「……」

「余計なことは他言無用ですよ、緑川さん」

## 第15話：糸口

新座から浦和までは途中渋滞に巻き込まれながらも、一時間かかることなく到着した。

そして雀荘周辺で聞き込みを行った結果、犯行時刻に柿沼を見たという者はいなかったが、柿沼を知る人物に行き着いた。

畑中義和、浦和駅前にある学習塾の責任者で、柿沼とは大学来の友人で今でも親交があるという。

まだ学習塾には生徒も講師も来ていないというので、中に入って話を聞くことができた。

「最近、柿沼さんとお会いしたのは？」

「うーん、一月くらい前だったかな……。久しぶりに顔を見たと思ったら、急用だから車を貸してくれと頼まれてね。1時間くらいで戻ってきたけども」

「では、先週の木曜日の夜8時頃に柿沼さんに会ってはいませんか？」

「いや、会っていないね。その時間は塾に籠もりつきりで、特別誰かが訪ねてきたということはないから」

畑中の口調からして、柿沼のことを庇っているとは思えない。

コナンはふと気になったことを口にした。

「ねえ、おじさん。車を貸したって言うってたけど、車ってどこに置

いてあるの?」

大通りに面しているこの建物に車を駐車するスペースはない。高木の車も駅前の交番に事情を説明し、一時的に置いておくくらいだ。

「ああ、ここから少し離れた駐車場に置いてあるんだ。いつも帰れるのは終電が過ぎてからだから、どうしても車出勤でね……」

「どちらから通われているのですか?」

口を挟んだコナンを咎めることなく高木が話を進める。

「ああ、杯戸町からですよ。ドライブは好きな性分だけど、こつ毎日同じ道だと飽きるものだね」

畑中は微かに笑いながら答え、それに合わせるように周りも愛想笑いを浮かべた。

杯戸町……。

そして空白の10分……。

今まで見えていなかったことが明るみに出て、点と点が線になりかけている。

あと一つ、何かパーツがはまれば……。

もう答えがそこまで出ている。

そんなもどかしい気持ちから、コナンは頭をかきむしった。

「最後にお願ひですが、その車を停めている駐車場に案内してもらつてもよろしいですか？」

高木がメモをしていた手を止め、立ち上がりながら言った。

畑中は快諾し、一同が表に出ると戸締まりを確認してから先頭に立ち、案内を始めた。

大通りに沿つて歩き、一つ目の交差点で右に折れると、一転して人通りが少なくなった。

その道を進み、またさらに右に曲がつたすぐ角に月極めの駐車場があった。

そこはわずか4台分ほどのスペースしかなく、畑中の車を含めてすでに埋まっていた。

その畑中の車の裏に回ると、丁度一人が通れるほどのビルとビルの隙間を見つけた。

その先を覗いてみると、10メートルほど先の別の道まで通り抜けられそうだったので、行つてみることにした。

「おつ、おい！どこいくんだよ！」

後ろから小五郎の声が聞こえたが、そんなことは構わずに進んでいく。

そして隙間を抜けると、案の定別の道にぶつかり、その正面に「和」という看板を掲げた雀荘があった。

あそこは確か……。

そうか、分かったぞ！

柿沼のアルバイトリックが。

あとは証拠さえ……。

もう一度隙間を通過して駐車場に戻ると、お約束の小五郎のゲンコツが待っていた。

「勝手にうるちよろするな！このバカ！」

コナンはその痛さに頭をさすりながら、恨めしそうに小五郎を見上げた。

## 第16話：解決

翌日、小五郎は目暮に電話をし、柿沼、緑川と刑事らを集めた。もちろん、コナンが変声機を使ったのだが。

「毛利くん、犯人が分かったって本当かね？」

全員が揃い、準備が整ったところで目暮が問い掛ける。

「ええ、全て分かりましたよ。堂山氏を殺害した犯人も、その方法もね」

窓際のソファーに腰掛けた小五郎が、机に肘を置き頬杖をつくといういつものスタイルで話し始めた。

その机の陰にはコナンが隠れ、変声機で代わりに話しているのは言うまでもない。

「ふん、俺にはアリバイがある。それは警察だって確認しただろう」  
柿沼の強気な姿勢は変わらない。

「ええ、あなたが犯行時刻に浦和にいたことは既に証明されていますよ」

「ほら見る！だから俺に犯行は無理なんだよ」

得意気な顔で隣に座っている緑川を、いかにも犯人だというように見つめた。

「しかし、途中10分ほど抜けたらしいじゃないですか？」

小五郎は変わらずに淡々と続ける。

「ああ、仕事の連絡があったからな。ただ、どうやってたった10分で浦和と杯戸町を往復するんだい？」

「いえ、杯戸町まで行かなくとも、あの犯行は可能なんですよ。いや、むしろ浦和にいたあなたにしか犯行は出来ないんですよ！柿沼さん！」

「ど、どういうことだね？」

今までの考えを覆される発言に、目暮が思わず声を発した。

「簡単なことですよ。堂山氏は杯戸町の公園で殺害されたわけではなく、浦和で殺害され、その後移動したのです」

「どうやって？まさか遺体が勝手に歩いたとでも言うのかね？」

「ははは、そんなわけはないですよ。まあ、その方法はそれほど至極単純ですがね」

驚きを隠せない目暮の横で、柿沼の表情がみるみると青ざめていく。

「あの日、堂山氏は浦和に呼び出され、雀荘近くの駐車場で殺害された。そしてそこに停めてあった車のトランクに積み込まれ、杯戸町まで運ばれたということですよ」

「あっ、畑中さんの車ですね」

聞き込みを行った高木が口を挟んだ。

「そう。あなたは一月ほど前に畑中氏の車を借り、合鍵を作ってトランクを開けたんだ。そして何食わぬ顔で雀荘に戻り、遺体は勝手に杯戸町まで運ばれる。いちいちトランクを確認する人は少ないですからね」

「そうか、それで終電で杯戸町に向かい、畑中さんの帰宅を待つて、もう一度合鍵を使ってあの公園に車をつけ、遺体を放置したんだ」

高木にもトリックが分かったようで、嬉しさのあまり小五郎に代わって揚々と話し始めた。

「で、でたらめだ！そんなのただの推測だ！」

柿沼は顔をこわばらせながらも、事務所中に響き渡るような声で怒鳴った。

「証拠ならありますよ。畑中さんの車から堂山氏の毛髪が検出されました。どうしてそんなところに被害者がいたという痕跡が残されていたのか？これをどう説明するということですか、柿沼さん」

小五郎が決定的な一言を放つと、柿沼は観念したように天井を見上げ、大きく一つため息をついた。

「そうです、私が堂山を殺しました。横領についての追及から逃れたくて、ついこんなことを考えてしまっただけ……」

そう言い終えると、柿沼は目暮らに連行されて事務所を後にした。

残された緑川も席を立ち、ドアを開けて帰ろうとした瞬間、コナンは小五郎の声で呼び止めた。

「緑川さん、参考までにお聞きしますが、犯行時刻にあなたはどちらにいらしたのでしょうか？何か警察には言えないような……」

緑川はノブにかけた手を降ろしたが、振り向くことはせずにしばらく立ち止まったままだった。

そしていささかの沈黙の後、消え入りそうな声で、

「何でもないんです……。ご迷惑をおかけしました……」

とだけ言って再びノブに手をかけ、事務所から去っていった。

## 第16話：解決（後書き）

やっとここまで辿り着きました。ただ、自分の中ではここからが本番のつもりなので、これからもよろしくお願いいたします。

## 第17話：懸念

次の日、コナンは学校から帰るとすぐに博士の家へと向かった。

「おお、新聞で読んだぞ。あの事件解決したそうじゃないか」

リビングへと入るなり、博士に声をかけられたが、

「あつ、ああ。まあな」

とだけ返事をして、ソファアに身を投げ出した。

「なんじゃ、解決したという割には元気がないのお。どうしたんじや？」

想像に反した曖昧な返事に博士は心配したようだったが、その問いに直接答えることはなく、再び質問で返した。

「なあ、灰原はどうしてる？」

「哀くんなら地下の研究室におるが……」

「なら丁度いい。実は、この前夕飯をご馳走になった帰りに杯戸町の公園に寄ったんだ。そしたら、公園の外……というよりも、マンションの脇に不審な車が停まっていたんだ……」

「ま、まさか奴らだと言うのか……？」

博士は真っすぐにこちらを見つめ、低いトーンで言う。

「ああ、停まっていた車はポルシェ356A。忘れもしねえ、ヤツの愛車だよ……」

「しかし、なぜそんなところに……?」

「ここからは俺の想像だけど……」

と前置きをし、そこで一息入れてから話を続けた。

「容疑者の一人だった緑川を監視していた可能性が高い。その人は科学者らしいから、奴らの息がかかっているもおかしくないってわけさ」

コナンはそこまでを一気に話すと、立ち上がって冷蔵庫に向かい、缶ジュースを取り出して再びソファに腰を降ろした。

「じゃが、真犯人が逮捕されて容疑からは外れたから、もう心配はいらんじゃろ」

「ああ、だといんだけどよ……」

いや、心配はそれだけじゃない。

もし俺の推理が当たっているとしたら……。

そんな言葉が喉元まで出かかったが、さすがにそこまで言うのは時期尚早と思い、持ってきたジュースと一緒に飲み込んだ。

「まあ、また何か分かったら報告すつからよ。とりあえず灰原には黙っておいてくれ。伝えるときは俺から伝えるから」

自らの心配すら打ち消すように、無理に明るい声を作った。

そしてジューズの残りを一気に飲み干すと、立ち上がって階段を降り、研究室のドアを叩いた。

中に入るといつもと変わらずに灰原がパソコンに向かって作業を進めている。

コナンはその後ろを通り、ベッドに腰を降ろした。

「何？」

灰原は手を止め、椅子ごとこちらに回転させて話かけてきた。

「いや、この前の夕飯の礼をちゃんと言ってないと思ってな。ありがとな」

どうしても灰原の方を直視できず、少し目を逸らしながら言った。

「……」

「えっ？」

コナンが全てを言い終える前に灰原が口を挟んだので、もう一度聞き返した。

「プラダのバッグ」

「はあっ?」

「冗談よ」

「ははっ……」

到底冗談とも思えないような真顔で言われ、ただただ愛想笑いを浮かべるしかなかった。

くその日の夜く

「よかったですね、緑川さん」

「はい、とりあえずは……。しかし、私はもうこんなこと……」

「ええ、今日はそのことについて良いお知らせがあつて来たんですよ」

「じゃ、じゃあまさか……」

「はい、もう研究を進めなくて結構ですよ。あなたとはお別れです。残念ですが……」

「ま、待ってくれ!俺は警察にも、あの探偵にも、あんたらのこと

は何も言っていない！信じてくれ！」

「おまじな」

パシユ……。

## 第18話：速報

柿沼の逮捕から数日、暦は12月に入り、色付いた木々の葉が道路を少しずつ埋めつつあった。

先日まで街中を吹き荒れていた北風も最近は影を潜め、穏やかな陽射しの下で過ごしやすい日々が続いている。

「また今日も依頼ありませんねえ」

「ちえっ、つまんねえなあ」

放課後、少年探偵団への依頼がないことを嘆く光彦と元太の声が校舎の入り口に響く。

「まあ、それだけ平和ってことね。いいことじゃない」

灰原が二人を諭すように言う。

「仕方ねえから、博士の家でもいってゲームでもしようぜ」

「うん、それがいい！」

コナンの提案に歩美が直ぐ様賛成し、5人は博士の家へと向かった。

家に着いて一同がランドセルを降ろし、コナンがおもむろにテレビのスイッチを入れると、画面にワイドショーが流れた。

そして設定をゲーム用に変えようとした瞬間、気になるテロップが

表示されたので、慌てて手を止めた。

「杯戸町で男性殺害される」

それに合わせるように、女性のキャスターが詳細を話し始めた。

「たった今入ってきたニュースです。今朝10時過ぎ、杯戸町のマンションに住む緑川彰さんが、何者かによって殺害されているのが発見されました。遺体は死後数日が経っており、警察では捜査を進めています」

コナンは耳を疑い絶句した。

「やられた……」。

まさか奴らがこんなに早く手を打ってくるとは。

「コナンくん、どうしたの？」

歩美の声にようやく我に帰り、ああとだけ誤魔化してリモコンのスイッチを押した。

元太たちがゲームに熱中し始めた頃、コナンは隙を見て博士と別室で二人きりになった。

「緑川さんがやられたよ……」

「な、なんじゃと」

博士は目を見開いて、隣の部屋に聞こえそうな声で言った。

「今ニユースでやってたんだ。恐らく犯人は奴らの……」

「どつするんじゃ？」

興奮した博士が遮るように問う。

「どうもこうもできねえよ。緑川とは何の接点もないからな。それに、おっちゃんのところには依頼がきたって、奴らのことだからどうせ痕跡など残しちやいないさ」

コナンは目を伏せながら、ここまで抑揚なく淡々と話した。そして一呼吸入れ、さらに続けた。

「もう少し緑川の周辺から探れば、何か浮かび上がったかもしれないけど……。結局振り出した」

「まあ、慌てるのは禁物じゃぞ」

博士のたしなめるような言葉にコナンは返すことなく、再び元太たちのいる部屋へと戻っていった。

「緑川を始末しました」

「そうか……」

「次は以前から気になっていたあの男を……」

「お前の好きに任せる」

「ありがとうございます」

## 第19話：電話

予想どおりではあったが、それから数日が経っても緑川殺害事件についての続報は、ほとんど耳に入ってこなかった。

奴らの犯行ならば、痕跡を残すような致命的なミスをするわけもない。

もちろんコナンらごく一部の人間からすれば、組織の仕業であるという凡その検討はついているのだが、それを主張することが、いかに無駄であり、さらには自らを危険にさらすことになることは痛いほど分かっていた。

コナンは放課後、探偵事務所に帰ると、部屋に一人であることを確認し、FBI捜査官であるジョディに電話をした。

「ハイ、クールキッド。どうしたね？」

いつもと変わらない陽気な声が返ってくる。

「早速だけども、この前杯戸町で緑川さんが殺された事件知ってる？」

「ええ、あまり詳しいことは分からないけど、知ってはいるわ」

「あの事件、多分だけど奴らの仕業だよ……」

コナンはトーンを落として言った。

「どっぴいっぴいっ」と。

ジヨディもコナンに合わせて、囁くように返した。

そこからコナンは柿沼の堂山教授殺害事件から、緑川のマンション前でポルシェ356Aを見たことまでの流れを話すと、ジヨディは一瞬考えた後に、

「分かったわ。とりあえず近いうちに会いましょう。それと、無茶は禁物ね」

と言い電話を切った。

探偵事務所にはまだ誰も帰ってこない。

コナンはポケットに携帯電話をしまい、ソファアに横たわって読みかけの推理小説の続きを読み進めることにした。

## 第20話：スパー

阿笠邸に帰り、ドアを開けようとしたが、鍵がかかっていた。合鍵を用いて中に入り、一声かけてみたもののやはり返答はない。どうやら博士は出かけているようだ。

そういえば、今朝博士に昼過ぎから出かけると言われていたのをすっかり忘れていた。

私は荷物を置いて白衣に着替えるなり、いつものように早速地下の研究室へ向かった。

いつものように……。

いったいどれほどこの繰り返しを続けてきたのだろうか。

学校から戻れば、即座にこの部屋に閉じこもり、PCと向かい合って作業を進める。

もちろん、そんな繰り返し嫌なわけではない。

APT X 4869という私が開発した薬によつて、工藤くんの日常を破壊してしまったことは紛れもない事実。

彼は、お前のせいじゃないと言つて笑つてくれたけれど、その解毒剤を開発することが私の義務であることに違いはないから。

しかし、今日も格別な収穫を得ることはなかった。

もうその開発は頭打ちともいえる状況まで進んでいるのが事実であった。

一時的に元の姿に戻せる解毒剤ならば完成した。

けれどもその効果はあくまで一時的であり、一日とすらもたない。いや、既に幾度か戻ったことのある工藤くんでは半日が限界かもしれない。

体内に解毒剤に対する耐性ができてしまえば、もう元の姿へと戻ることは不可能になる。

正直、工藤くんはその一歩手前まできている。

きっと彼のことだから、工藤新一の姿で蘭さんにいいところを見せたいのだろうけど……。

このままでは、完璧な解毒剤が完成したとしても、一生江戸川コナの姿で過ごすことになってしまう。

だから一刻も早く完成品を作りたいのだけれども、そのためには手元の資料では不十分だ。

やはり組織を壊滅させて、A P T X 4 8 6 9 に関するデータを全て集めないことにはどうにもできない。

しかし、それがどれほど難しいことであるかは、組織の一員だった私自身が一番よく分かっている。

そんなことをあれこれと考えていたら、結局ほとんど何も進まないうちに、時刻は17時を回っていた。

博士はまだ帰ってきていないが、そろそろ夕飯の支度を始めなければ。

研究室を出て階段を上がり、再び外出着に着替え買い物の準備をした。

外に出ると既に日は落ち、冷たい北風が打ち付けてくる。

その寒さに耐えるように両手を擦り合わせ、スーパールの方へと進んでいった。

住宅街を抜け、繁華街に出ると街は一面クリスマスイルミネーションに彩られていた。

もう12月だものね……。

そんな一抹の寂しさを覚え、気付けばスーパーの前に到着した。

入口の自動ドアを通り、買物かごを手にした瞬間、

ビクッ……

背筋の凍るような悪寒が体を走り抜けた。

そう、それは組織の人間が近くにいるときに感じる私特有の感覚。

誰、いったい誰なの!?

私、見張られてる?

しかし、その思いとは裏腹に、あまりの恐怖ゆえに辺りを見回すことすらできない。

慌てて携帯電話をポケットから取り出し、震える手で発信履歴からコナンの番号を探しだした。

そして助けを求めようと、発信ボタンを押そうとした瞬間、別の考えが頭を過った。

今ここに工藤くんを呼んで、彼まで組織に見つかるわけにはいかない。

やっぱりこの場は私一人で……。

そう思い直すと、携帯電話を再びポケットに戻し、周囲に怪しまれないよう買い物を始めた。

しかし、内心それどころではない。

周りの様子ばかりに気を取られ、何をかごに入れればいいのかすら分からないほどの混乱状態まで陥っていた。

結局、材料ではなく出来上がった弁当を二つだけ入れ、急いでレジに並んだ。

とにかくこの場から少しでも早く離れたい。

しかし、そんな一心を裏切るかのごとく、夕刻のスーパーは主婦たちで溢れかえり、どこのレジも長い行列を作っている。

仕方なく中程の列の最後に並び、祈るような気持ちで順番を待った。

そして一人目が会計を済ませ、一步前に進んだところで肩を叩かれた。

「君は……」

## 第20話：スーパー（後書き）

いつも読んでくださいまして、本当にありがとうございます。20話までできましたが、全然話が進まずに申し訳ありません。これから頑張りますので、よろしくお願いいたします。

## 第21話：電話

推理小説を読み始めると、周りのことは一切目に入らず、自分だけの世界に埋没する。

それは工藤新一の頃からのコナンの楽しみの一つであった。

この日もジョディとの電話を終えた後はトイレに立つことすらせず、ただただ読み進めていた。

そしてどのくらいの時間が経ったのか自分でも分からなくなっていたときに、不意にポケットに入れた携帯電話のバイブ機能が振動した。

至福の時間に水を差されたことで、ちょっとした苛立ちを覚えつつも、画面を開いてみると電話番号とともに「毛利小五郎」と表示されていた。

「おじさん、どうしたの？」

「ああ、今蘭にも連絡したんだが、今日は仕事で帰りが遅くなる。だから晩飯は二人で食べて構わん。それじゃ、よろしくな」

小五郎は要件だけを簡潔に伝えたと、すぐに切ってしまった。

仕事か……。

今朝はそんなことは言ってなかったから、昼に急遽入ったのか。ま、それかどうせきれいなお姉さんと一緒に食事でもするんだろ。

そう深く考えることもなく、ふと外に目をやると、空は夕闇に染ま

り、時計に目を移すと17時半を指していた。  
すると、再び携帯電話に着信があり、今度は蘭からだった。

「あつ、コナンくん。今お父さんから電話があつただけど……」

「うん、僕にもあつたよ。帰りが遅くなるってことでしょ」

「そうなんだけど、実は私もお母さんのところにちょっと用事があるから、遅くなっちゃうのよ……。一人で大丈夫？」

申し訳なさそうな声で蘭が心配する。

「大丈夫だよ。また博士のところについてくるから。だから心配しないで」

そう答えると蘭は安心したようで、なるべく早く帰るからと言って電話を切った。

コナンはまたかと思いつつ、この前のようにいきなり訪れると、灰原に嫌味を言われるのが目に見えていたので、念のため電話を入れることにした。

しかし、コール音が鳴り続けるだけで、結局は留守番電話になってしまったが、大した用件でもないので、メッセージを入れることなく切ることにした。

そして、部屋の電気を消し、戸締まりをして博士の家へと向かった。

「君は……博士のところの……」

その声をかけられた灰原は顔から一気に血の気が引き、足が震えだした。

恐る恐る振り返ってみると、そこには背が高く、髪を茶色に染めた若者が立っていた。

……沖矢昴……。

東都大の院生で、以前住んでいたアパートが火事にあい、現在は工藤宅で暮らしている。

しかし灰原にしてみれば、時折組織の気配を感じることもあり、今一信用しきれしていない人物でもある。

このスーパーに入った瞬間に感じた組織の気配は、この男のものだったのか。

そう考えた灰原であったが、あまりの恐怖故にただ立ち尽くすだけで、体を動かすことができない。

丁度そのとき、携帯電話の着信を知らせるバイブ機能が振動したが、それを手にする余裕などあるはずもない。

「買い物かい？」

と言いつつ、沖矢は灰原の後ろへと並んだ。

その様子からは、組織の人間が裏切り者を狙っているというような雰囲気は伺えなかったが、それでも灰原の警戒心が解けたわけでは

ない。

ようやくレジの順番が回り代金を支払うと、灰原は逃げるようにスーパーを後にした。

途中後ろを振り返る余裕もなく、気がつけば博士の家が見えるところまで来ていた。

そして家の前にコナンが立っているのを見つけ、慌てて駆け寄った。

「よお、携帯にも出ねえでどこ行ってたんだ？」

工藤くんに本当のことは言わない方がいい。

そんな考えが咄嗟に頭を過り、ただ一言、買い物よとだけ答え、二人は家の中へと入っていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9377g/>

---

全ての行き着く先

2010年10月21日20時23分発行